随筆

水源池の思い出

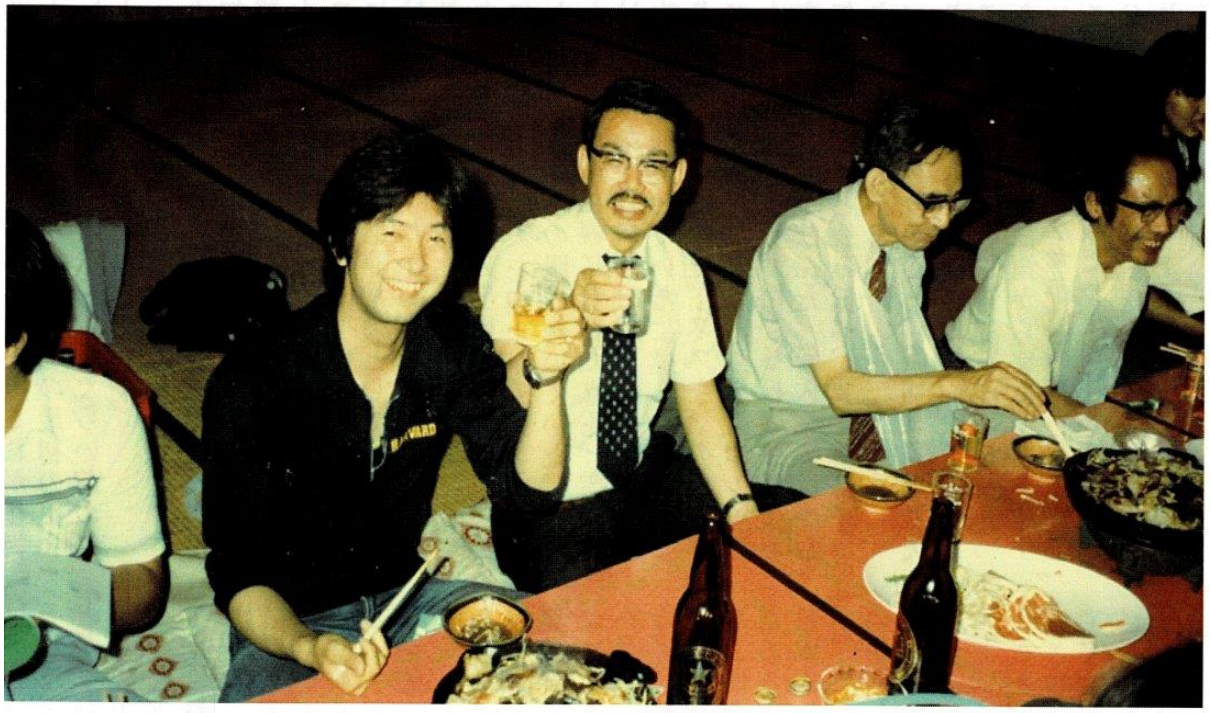
渡辺 雅司
わたなべ まさじ

「渡辺っさん、あそこに原生林が見えるでしょう。あの奥に水源池というとってもいいところがあるんですよ」遠くを指さしながら福島訛りでこう教えてくれたのは、つやつやした丸刈り頭の長身の老紳士、当時学科長だった菱沼圭介先生だった。一九七五年三月末。その日の早朝、私はフェリーで苫小牧に着き、月寒中央にあったブルーノートという喫茶店で、深水先生と落合い、札幌大学の先生方との初対面に臨んだ。終始友好ムードで、幾度もお茶のお代わりをし、そろそろお開きという頃に、菱沼さんの言った言葉だ。池袋という都会で育った私には「原生林」、「水源池」という言葉が、強烈に胸に突き刺さった。「よし、引っ越しが済み次第、行ってみよう」そう心に決めた。

家もまばらな未舗装の尾根道を走って、心ときめかして水源池を目指す。左手には農林試験場、右手奥にはまだ雪をかぶった藻岩山と空沼岳の峰が一段高いところに見えた。この尾根道の突き当り、右に大きくカーブするあたりに「水源池前」というバス停が見えた。道端に駐車し、残雪を踏みしめてヒマラヤ杉の巨木が連なる道らしきところを行くと、突然視界が開け、湖面が飛び込んでくる。遥か奥には尖った恵庭岳が望まれる。まさに絵のように美しいとはこのことか。札幌には六年しかいなかったが、水源池が突然、目に入るこの瞬間はいつも心ときめいたものである。そのときめきが日常生活を忘れさせ、美と静寂の世界に浸れるのだ。しかもこの光景は一度として同じことはない。季節ごと、いや時々刻々とその姿を変容させていく。コンパクトながらこれほど調和のとれた風景は見たことがない。湖岸に降りる鉛色の石の階段の後ろに素朴な案内板があり、そこには明治時代に旭川連隊によって飲料水を確保するために掘削されたと書かれていた。

旭川連隊。札幌に赴任することを知った九〇歳になる私の祖父、日露戦争の激戦地二〇三高地の喇叭手として突撃、手足に貫通銃創を負いながら生き延び、その後，乃木希典に見込まれ学習院の守衛長を務め、明治天皇崩御の日、夫妻で自害した乃木邸に最初に駆け付けたという祖父が、懐かしそうに月寒（ツキサップ）に駐屯していたという話をしてくれたことを思い出した。ということは私の祖父も明治三〇年代にこの水源池の掘削作業に従事したに違いない。それだけで、この人造湖でありながら、今や周囲の自然と一体化した水源池が、私の体の中にスッと入ってくるような感覚を覚えたのだった。

対岸の月寒川の源流が流れ出すあたりには、色あせた煉瓦造りの給水塔がある。八面体のとんがり帽子のこの塔が、この



美しい光景にメルヘンの香りを添えていた。西岡公園として整備されるまえだから、すべてが時間の中に吸い込まれていた。この給水塔も、壁の煉瓦は剥がれ落ち、ガラスはすべて割れ、鉄のレールを渡り中に入っても、床板はとうの昔に抜け落ち、茶色い水がよどんでいた。

水源池の周りには柵もなく、もちろんベンチも四阿もなかった。この時間の中に打ち捨てられている感じが、ぼくには何よりもあずましかった。散策路も整備されてはいなかったので、右岸の狭い水際を奥に歩いていくと、悪魔を思わせるような異形をしたとげだらけの黒いものが無数に転がっている。それが菱の実であることはのちに知った。そのときはこの奇怪な物体が、この湖の謎めいた空気をなおのこと濃くしていた。それ以来、水源池通いが私の日課となり、東京から知人が来るたびにそこに連れて行ったものである。

その日はそれで切り上げ、大学の生協食堂に入った。朝から何も食べていなかったのだ。ジーンズの上下姿の私は、チケット売り場で学生証の提示を求められた。新任の教員ですと説明していると、「渡辺先生ですか?」と弾むような声で話しかけてくる女子学生がいた。この目を輝かせる色白の女子学生こそ、私の最初のゼミ生となる加藤美保子さんである。「私はおぼえている、この妙なる瞬間を。私の前に君が現れた。つかの間の幻，純な美の神のごと」というプーシキンの有名な

詩が思わず口をついて出る。これが札幌大学ロシア語学科の学生との最初の出会い、新学期が始まる一〇日ぐらい前のことだった。

授業が始まり、私は教壇に立った。二九歳だった。ただロシア語を教えるのは初めてではなかった。学生時代に乗った蟹工船で、船長に半年ロシア語を教え、大学院時代には東中野にあったマヤコフスキー学院というロシア文学学校、それに学習院大学でも非常勤としてロシア語は教えてきた。しかし専任として初めて教える札幌大学の活気は桁外れだった。なんとその年の新入生は一二五人、二つに分けても六〇人を超すマンモス授業。しかし学生たちの眼は輝いていた。わずか一〇日前に札幌に着いた私も、雪が解け、草草が一斉に芽を出す北国の春の息吹に目を輝かせていたに違いない。つまり波長が合ったのだ。ススキノのジンギスカン屋で催された新入生歓迎コンパはとんでもない人数、浴びるほど生ビールを大ジョッキで飲んだ。新入生では少し年長の堂園君と飲み比べ、要するにイッキをしたのを今も思い出す。

けもの道をたどると、農林試験場に入り、そこからは焼山や白旗山までも行くことができる。あれは札幌生活何年目だったか、いつもの散策から家に戻ると、テレビでは西岡にクマが出没と報じていた。これはのちに誤報だったと訂正されたが、父親が試験場の職員だった宮下君が、あれは本当の話ですよと伝えてくれた。私は肝を冷やしながらも、その反面自分がそれほどの大自然の懐に抱かれていることがうれしかった。

その頃ロシア語の表現で気にかかっていたことがあった。ゼリョーナヤ・タスカー（緑の憂愁）。なぜ憂愁に、緑という形容詞がつくのか？　水源池の周りをさまよう私にとって、緑は、最も気持ちのいい色だった。とりわけ白樺やカラマツが芽吹く五月末の新緑は、どこまでも優しく、包んでくれる色だった。なぜそれが憂愁（二葉亭四迷はこれをふさぎの虫と訳した）と結びつくのか？　なぜだ、なぜだと林道を歩きながら自問していた。ある時ふと、ロシアの場合、おそらく針葉樹がさらに深い森だろう。そこにさまよいこんだロシア人はどう感じたろうか？　西欧ではムンクの絵を見るまでもなく、緑は嫉妬を表す色だ。しかしロシア人にはそれは、無限に続く、ちっぽけな人間を吸収してしまうような、色なのだろう。それは思わぬひらめきだった。日本人にとって、緑は優しいイメージだが、ロシア人には恐れおののかせる色なのかもしれない。自然に対する畏怖の心、これを日本人は忘れてはいけない。それはおそらくナロードに対する我々のイメージにも重なるかもしれない。我々は民衆というとき、ある種包み込むようなやさしさを内包するだろう。しかしロシア人にとってのナロードは、もちろんやさしさもあるが、時に荒々しく、粗暴でインテリなど寄せ付けぬ存在でもあった。当時ピーサレフの研究をしていた私にとって、インテリゲンチアとナロードの関係は、切実な問題だった。そんなことを考えながら、緑のトンネルを成す林道をさまよい歩いていたのである。

西岡ゴルフ場の奥に、西岡ガーデンというジンギスカン屋があったことをおぼえているだろうか？　私はそこにまさに迷い込んだのだ。まだ春先のこと、うずたかく残雪が残った小道を歩いていくと、浪花千栄子を思わせる小柄なおばあちゃんが出てきた。腹をすかしていた私は、「ジンギスン、食べられますか？」と尋ねた。すると営業はしていないけど、ごちそうするよと言ってくれた。これが私とジンギスカン鍋の最初の出会いであった。それ以来、彼女は、漬物や野菜を私の校宅に届けてくれたのだった。単身赴任の私の健康を気遣ってのことだった。私も週に一度はジンギスカンを食べによったものである。

あれは札幌生活三年目の夏。それまでロシア事情を担当されていた佐藤勇先生が勇退されたのに伴い、私は先生方にわがままを言って、そのころロシア文学研究の最先端を行っていた江川卓、原卓也先生を、非常勤でお願いしたのだった。江川卓先生が初めて夫人同伴で西岡を訪れた時のことである。当時「謎解き罪と罰」を構想していた江川さんの講義は、札大生にとっては新鮮だったろう。三日目の講義を早めに切り上げてもらい、この西岡ガーデンで、江川卓歓送会をやったのである。江川卓夫妻（ちなみに私たちの仲人である）、貝沼先生、

相馬先生、それに英語科ながらロシア語の勉強もされていた布施先生、それに学生たちが四〇名も参加しただろうか。そのときの写真が、つい最近出てきた。今や還暦も過ぎたであろう学生諸君の若き日の姿がそこには焼き付けられている。みんな若い。髪も豊かにある。まだ明るい時間で、窓の外には相馬先生の愛車が見える。みな解放感に満たされ、ついには歌を唄った。カラオケなどない時代で、マイクだけがあった。それを使って大音響で、水源池に向かって唄うのだ。江川さんもロシア民謡の「黒い瞳」を熱唱した。あの時のことは、おそらく学生たちも鮮やかにおぼえているのではないか。

水源池に関する私の記憶は、息子の玲男（レオ）と結びついている。彼を真っ先に連れて行ったのも水源池だった。当時三才だった彼も、水源池が大いに気に入ったようだった。大学から早めに戻ると、「行くか?」が合言葉だった。そして万が一を考え、ライフジャケットを購入、毎回それを付けさせた。それというのも、その前年に魚釣りに来た高校生が、水源池で溺死していたからだ。これさえつけていれば、一人で行っても心配はない。しかし最初は私が気に入っているスポットをすべて案内した。まだ公園化する前だから、危険はいっぱいだった。その分自然はいっぱいだったから、息子はそのたびに目を丸くしていた。今でも鮮やかにおぼえているのはクワガタを最初に採った時だった。

月寒川が流れ出すところにかかった鉄の小橋を渡ると、数段の階段があり、小さな水神様の祠がある。その前にクヌギの巨木が立っている。子供のころ昆虫採集に熱中した私は、クワガタのとり方を知っていた。場所も気候も違うので自信はなかったが、片足で思い切り蹴ってみた。私も驚いたが、バラバラと四、五匹のミヤマクワガタが落ちてくるではないか。最も感激したのは、息子だった。興奮しまくっていた。その夏なん十匹もクワガタをとった息子は、大きな水槽につたない文字で「クワガタの王国」と書き、二年ばかり幼虫を取り、飼育していた。札幌を去ってから二〇年ぐらいして、集中講義に行ったとき、水源池であのクヌギに再会した。そこには息子がつけたと思われるひっかき傷が残り、そこには数匹のクワガタが蜜を吸っていた。

今私はこの文章を、葉山の山奥、谷川にせり出すようにかかった不動尊の社の小さな座敷で書いている。平家の落人部落といわれるこの里山には、天皇、皇后がバードウォッチングによくお忍びで来られるという。この里山にたどり着くには、水源地入口という信号をわたらなくてはならない。山からの清冽な水が湧き出るこの不動尊にはほとんど毎日のように訪れる。かつて西岡で水源池に誘われたように。それも水源地入口を通って。この水源地とは、葉山の御用邸のためのものだという。昨日、雨が降りしきる中、ミンミンゼミがひっくり返っている。萌黄色の筋が鮮やかだった。拾い上げてみると、かすかに鳴き声をたて、羽根をばたつかせるではないか。私は屋根の下にそっと置いてやった。ところが今朝来てみると、セミはもはや動かなかった。そのとき足の長い一匹の蜘蛛がセミにそっと絡んでいるのを発見した。臨終のセミから、最後の体液を吸っているのであろう。これが生命の循環、自然の荘厳さなのだと、思わずはっとさせられた。

その時西岡水源池で、息子や息子の友達たちと目撃した、エゾハルゼミの羽化の瞬間を思い出していた。あの階段を下りたあたりの落葉松の巨木の幹につかまったセミのさなぎが、まさに羽化を始めるのに気が付いた私は、はしゃぎまわる子供たちに、この脱皮の瞬間をじっと見守るように命令した。まさに命令したのだ。私が真剣なのに気付いた子供たちは、動き回るのを止めて、じっと見つめ出した。その間およそ一時間、最後の瞬間、腹筋力を振り絞って反り返ったかとみると、次の瞬間、濡れた透き通った羽根と、柔らかい胴体が木の幹をつかんだのである。エゾハルゼミの誕生だ。この瞬間は、ぼくの人生でも忘れられない記憶の一つを成す。それから四〇年、老人の域に達した今、札幌とは遠く離れた葉山の地で、この原稿を書いている場所で、死にゆくセミの姿に胸打たれるとは！　これは偶然とは思えない。生命の連続、宇宙の一体性、その中で私も一粒の粒子のような存在にすぎない。そんなことを思いながら、この文章を閉じる。